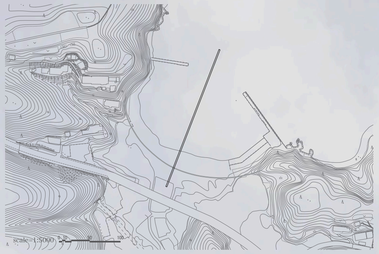
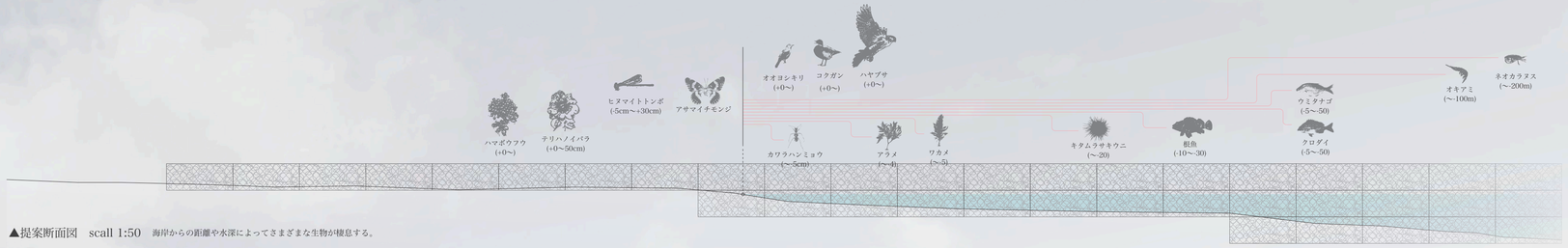
市民の手で壊された防潮堤の残骸を蛇籠にいれ、海に向けて一列に並べていく。

蛇籠の空隙は、浜から沖に向かい距離や水深などの環境の違いに応じた様々な生物の棲となるとともに浸透性の防砂堤となり、津波によって失われた生態系と砂浜を取り戻す。
豊かになった生態系との関わりや、沖へ続く新たな動線を通じて人は海との付き合い方を模索していく。

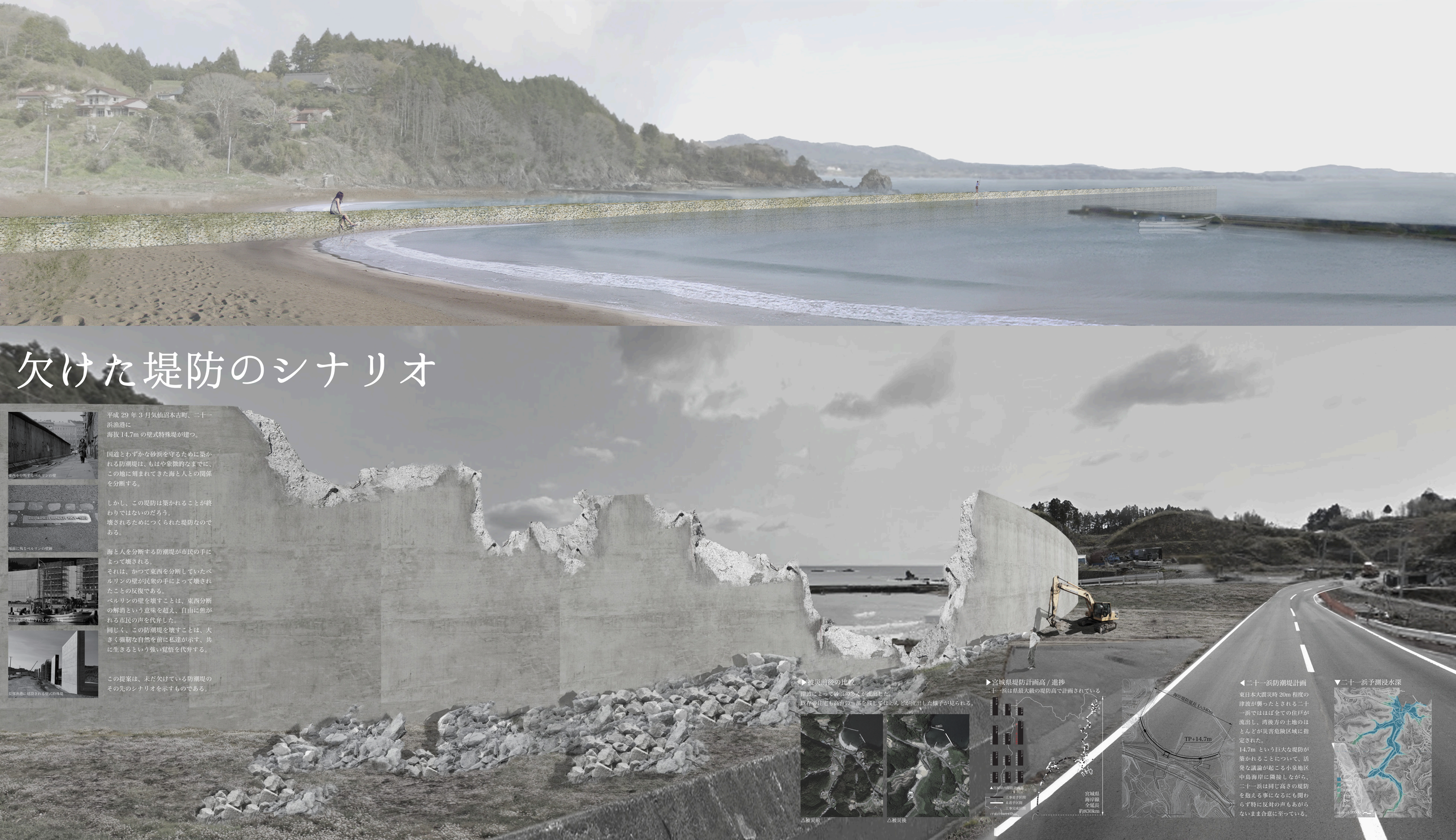
時間が経過すれば、蛇籠の中の砕石は角が削られ小さくなり、新しく出来た空隙には流木などが絡まりながら徐々に中身が交換され、二十一浜の自然の一部になっていく。



◀提案配置図
人の営みと強大な海を、かろうじて繋ぎ止めるように細い軸線が一本のびる。そこに多様な生態系がからみつくことで、二者の結びつきをより強固なものにする。
通常のコンクリートによる不透過性防波堤では、漂砂の上手側と下手側で著しい不連続性を示し、局所的な砂浜形状となるが、蛇籠による透過性防波堤によって上手側と下手側で連続したなめらかな曲線を描く砂浜が形成される。



▲提案断面図　scall 1:50　海岸からの距離や水深によってさまざまな生物が棲息する。



欠けた堤防のシナリオ

東西を分断するベルリンの壁

地面に残るベルリンの壁跡

共同漁港に建設される壁式特殊堤

民家漁港に建設される壁式特殊堤

平成 29 年 3 月気仙沼本吉町、二十一浜漁港に
海抜 14.7m の壁式特殊堤が建つ。

国道とわずかな砂浜を守るために築かれる防潮堤は、もはや象徴的なまでに、この地に刻まれてきた海と人との関係を分断する。

しかし、この堤防は築かれることが終わりではないのだろう。
壊されるためにつくられた堤防なのである。

海と人を分断する防潮堤が市民の手によって壊される。
それは、かつて東西を分断していたベルリンの壁が民衆の手によって壊されたことの反復である。
ベルリンの壁を壊すことは、東西分断の解消という意味を超え、自由に焦がれる市民の声を代弁した。
同じく、この防潮堤を壊すことは、大きく強靭な自然を前に私達が示す、共に生きるという強い覚悟を代弁する。

この提案は、未だ欠けている防潮堤のその先のシナリオを示すものである。

▶被災前後の比較
津波によって砂浜のうくがが流出した
既存の住宅も高台の一部を残してほとんどが流出した様子が見られる。

△被災前　△被災後

▶宮城県堤防計画高 / 進捗
二十一浜は県最大級の堤防高で計画されている

◀二十一浜防潮堤計画
東日本大震災時 20m 程度の津波が襲ったとされる二十一浜ではほぼ全ての住戸が流出し、湾後方の土地のほとんどが災害危険区域に指定された。
14.7m という巨大な堤防が築かれることについて、活発な議論が起こる小泉地区中島海岸に隣接しながら、二十一浜は同じ高さの堤防を抱える事になるにも関わらず特に反対の声もあがらないまま合意に至っている。

▼二十一浜予測浸水深